

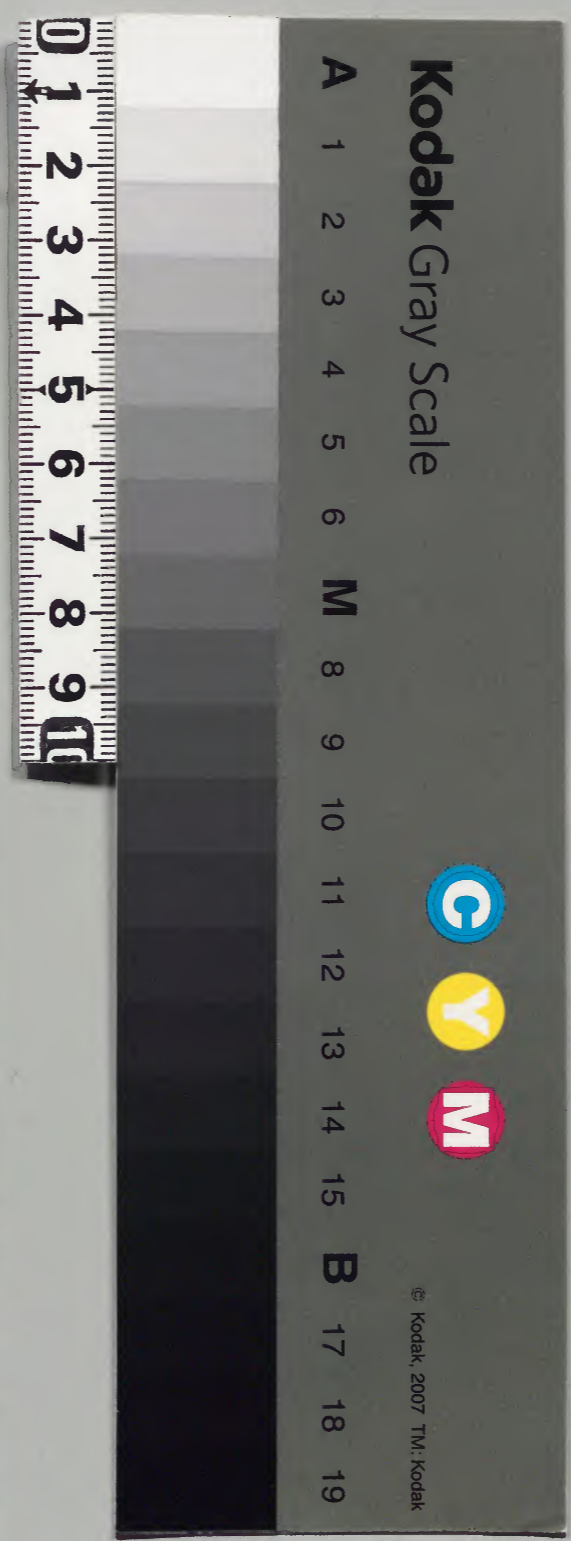
日本書紀傳 十五卷

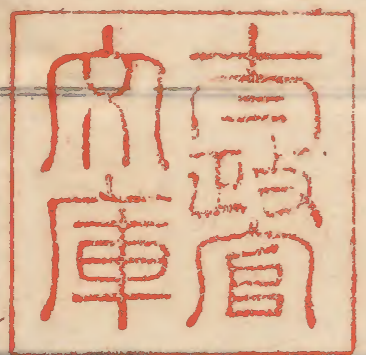
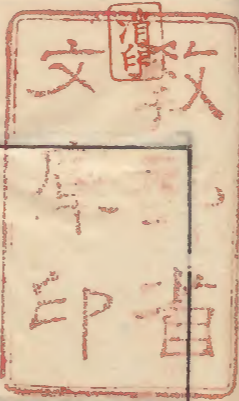
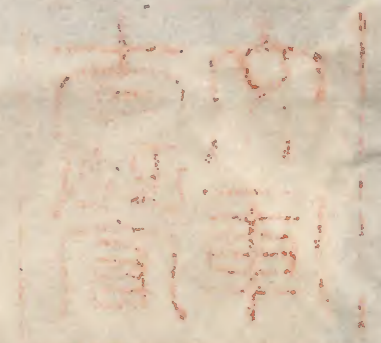
和 一〇五二二號

四十一

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (50)
函號	特 85 1

附一六八三號





内一六八三號

折給へる段毎小各一柱神成坐りて爲る時ハ必三男
 神ふる可き事彼三女神の御事ふ於るが如く又第一
 一書小日神云ニ躬帶十握劔九握劔八握劔云ニ先食
 所帶十握劔生兒云ニ又食九握劔生兒云ニ又食八握
 劔生兒云ニ凡三女神矣又第三一書小も於是日神先
 食十握劔化生兒云ニ又食九握劔化生兒云ニ又食八
 握劔化生兒云ニ有ふぞハ異ふる傳ハ有れども
 十握劔九握劔八握劔の三劔より三女神の成坐るを
 此男神の故事小換て見る時ハ此も同く三男神の
 外小出ざる者ふり然れば第一一書を本傳と立置て

○日本書紀傳十五

○二百九十七

其餘三女神の成坐り古傳を此に取換見る時ハ愈
以て三男神御在り坐す御事甚ニ明くふる者ふ
り但此事此の男御子の御事のいふてハ心行テ難
く見てもや多うりふむ立復りて上ふる三女神の本説
を以て行はば少くも
疑ふ所無くむ者る

是時天照太神勅曰原其物根

則八坂瓊之五百箇御統者是

吾物也故彼五男神悉是吾兒

乃取而子養焉又勅曰其十握

劍者是素戔嗚尊物也故此三

女神悉是爾兒便授之素戔嗚

尊此則筑紫胸形君等所祭神

是也

此ハ先ハ素戔嗚尊の請與共誓^天誓約之中必當生子
如吾所生是女者則可以為有濁心若是男者則可以為
有清心と申給へりし誓言驗有て右の如く男御子を
生給へる故ハ第三ノ書ハ便化生男矣則稱之曰正哉
吾勝故因名之曰勝速日天忍穗耳尊云々有る如く
誓勝給へりし由を申頭ハ奉らせ給ひける不依て
故日神方知素戔嗚尊元有赤心と云ふ至りて此迄の
御疑速ハ暗させ御在し坐て今ハ詔給ふ可き御事全
ク無き不至らせ給へるが如く但其一書の始ハ日
神云々乃立誓約曰汝
若^不有奸賊之心者汝所生子必男矣と有て此ハ
日神より誓言を立て其驗を試給へるふり何れハ

も有第一ノ書ハ故素戔嗚尊既得勝驗於是日神方
知素戔嗚尊固無惡意と有て実ハ勝驗を得させ給ひ
けり然れども始昇天の時所此則神性雄健使之然也
と有り古事記石屋不因此言者自我勝云而於勝佐備
云々見えたる如く神性雄健く御在し坐不依て勝
佐備ハ猶進ませ給ふ可き下の御心もや見えさせ給
へりけむ此を以て正哉吾勝と宣給ひて勝速ぶる其
御心を抑止めさせ給ひて其男御子女御子の生出さ
せ給へりし物実を以て判断し給ふ所ふり日神の女
御子を生
坐す不合せて素戔嗚尊の男御子を坐す是ハ相
持不何れハ勝劣ハ非りけり女御子を坐

す小因て日神の御負て故此御誓小依て男御子の頭
申す小ハ且て非るふり出させ給へるハ素戔嗚尊の固より清心の御在る坐
る驗の表れたるふり然れども其物実を以て成立を
云時ハ日神の大御子小坐故小誓小ハ勝給へども御
子ハ汝子小ハ非ずと詔給へるふ此一件の趣ふり
ける上丁十五小己小註る如く其始伊弉諾伊弉册二大
神の何不生天下之主者歟と詔給いて生坐る御子神
等小御在し坐（ふく）せい素戔嗚尊小天下ハ事依り給へれ
ども其最前小成坐（根國小誕生す可く幽契有て所知者了成り又）小日神ハも高天原（を所知者了大神神か）ハ御在
し坐（せば此國土ハも無主マ國の如くふるを今茲小誓言約の御申成坐り御子に依て）ふ（）此天下を相持たせ給ふ可き幽契有て此

二柱（小巨れる）の御子天忍穗耳尊ふび天下の大君ハ定り御
在る坐す（可き理）原ハも此時小至りて定りたりけ
く天孫降臨章弟一書小天照太神曰豊葦原中國是
吾兒可王之也と見え宝劔出現章弟五書小素戔
嗚尊曰韓郷之嶋是有金銀若使吾兒所御之國不有浮
宝者未是佳也とも有る如く相共小吾兒と宣ハせ御
在る坐す事の起り此時小在る事ふり（容易く思過）
此と古事記とふハ此物根の事有て條理甚と正しく
聞ゆるを一書共小此事を漏せるハ此小譲りたると
ハ云ふがく盡さば〇物根ハ物種と訓来れり古事記
ハ此を物実と有り記傳七（五丁）小佐（泥）跡と多（泥）跡とハ

其物も名も通へり後世も人の母を云ふハ其腹マ
云ひ人の父を云ふハ其種ト云ふ水草の種子も同
此も其意ふりと云れたるが如く此多泥と云事ハ
も水草の種子を云が本ふて多々ハ田畑（云ふ）の多小同
く種子を蒔殖る地盤を云ひ泥ハ根（云ふ）ふて其蕃息り出
る本根を云語ふり借人の生るゝや母腹（云ふ）は田（云ふ）に
生出と雖も其本根ハ父小在る故小其素姓を云時小
ハ父祖の胤種を称ふ事常ふり天孫降臨章小妾所（云ふ）娘
若非天孫之胤（云ふ）以（云ふ）當（云ふ）蠱滅如冥天孫之胤（云ふ）父不能害弟五
一書小も妾所（云ふ）娘若非天神之胤者必七是若天神之胤

第六百五十五卷
方知實是皇孫之胤

者無所害（云ふ）有り又海宮遊行章第七一書小豊玉姫謂
天孫曰妾已有娠天孫之胤豈可産於海乎（云ふ）弟九一書小
天孫之胤不宜置此海中と有る胤字を今本小美古と
訓たれども父種より云所ふれば何れも多泥と訓べ
き所ふる者（云ふ）弘仁私記序小神胤皇裔指掌灼然慕
方庶氏陳高貴之枝葉（云ふ）三韓蕃賓（云ふ）日本神胤（云ふ）有る胤
ふ（云ふ）右の多泥小同ト事（云ふ）根（云ふ）字名義抄（云ふ）泥（云ふ）も
加岐理（云ふ）波自米（云ふ）も有る此小（云ふ）諸古事記（云ふ）物実（云ふ）
多（云ふ）訓（云ふ）謂（云ふ）義訓（云ふ）有る実ハ物種を佐泥と云り和名抄小核桃李之類皆
有核和名佐祢核者子中之（云ふ）實也と有り此核より芽生
る物ふれば真根（云ふ）と云義ふり又酸棗和名佐祢布止と

有ハ核太サネブトの謂ふり又李衡和名加無之乃佐祢柑子人名也又桃奴桃人一名桃奴和名毛三乃佐祢と有り此を以て記傳ハ佐泥マ多泥マハ其物も名も通へり云れたる事の徴有と曉る可く名義抄ハ核ハ佐泥又麻許登又阿伎良加ルと云訓有ハ同抄ハ又誠を麻許登又佐泥と有り又此実ハ美マも佐泥マも云訓有て其言も義を相等しくハ字ハ異有れども其言ハ一ふるが故ふり又万葉九ハ立易月重而雖不遇核ハ所志面影思天マ有ハ実ハ通ハ核ハ字を用ひたり此佐泥ハ十四卷二十丁ハ安是登伊敏可佐宿尔安波奈久尔十五卷三十四丁ハ伎美尔故布良牟比等波左祢安良自廿卷十二丁ハ伎美乎安我毛布登伎波佐祢奈之ふと云ハ佐泥ハ俗ハ麻許登ハ

ど云ハ同ハ核ハ此ハ用無キ事ハ右ハ云る如ク実ハ核ハ佐泥マ訓ハ其例ハ引る方リ又記傳ハ云ク崇神天皇御紀ハ倭國之物実云ニ此云望能志呂と有ハ別事ハ祝詞ハ禮代マ云ハ今商人の代物ト云ハ此実ハ天孫降臨章弟マ一書大物主神也云レキ予ガ説ハ天孫降臨章弟マ一書大物主神事代主神の御名の並ビ○原ハ多豆努禮婆マ訓ベク出たる所ハ云ベキふり○其物根ハ原モトづきて言を成し給へる方リ皇仁天皇ニ十五年御紀ハ微細未探其源根以粗留於枝葉マ有探も多豆努ハ此の例方リ万葉九二十ハ手綱乃濱能尋来名益十九丁ハ小鷺八頭可頭氣臣河瀬多頭祢牟又二十ハ叔罷河湍乎尋都追二十一ハ夜麻加波乃佐夜氣吉見都ニ美知乎多豆祢奈ハ有リ名義抄ハ原を波良

とも麻奴加流とも由流須とも母登とも加叙布とも
多豆奴とも多豆祢美礼婆とも訓い又俗小母登豆久
とも訓来れる字ふり漢書註ふ○八坂瓊之五百箇御
原謂尋其本と見えたるふり
統ハ右小謂ゆる物根ふり但此物根の本説いも上
小往ニ辨たるが如く第二一書小男御子の物根ハ劔
小して女御子の物根ハ玉ふりける是正説ふれども
此を始として其餘の傳ニ共小其を誤れりける者ふ
りうう且右小既而素戔嗚尊乞取天照太神髻鬘及腕
所纏ハ坂瓊之五百箇御統と有を古事記ふも左右の
御髻又御鬘又左右の御子小纏せる珠を乞度して吹
棄給へる毎小各一柱の男御子生坐て允て五男神と

云ふ傳ハ有れども上小己小論め云る如く此時小
生坐る男御子ハ三柱小ころ御在り坐けれ其亦名の
相重複れるが爲小五柱と成れるふれハ其御髻御鬘
御腕小纏持せる瓊の數小合ればとて強て信い難え
事ふり其上其八坂瓊之五百箇御統ハいも日神の武
備小装給へるふれハ其物根と成れるとハ本より異
ふる物ふり何小在れハ坂瓊之五百箇御統より五男
ふり然れハ古事記ふ各纏持せる所いより神の
生坐りと爲るハ其上ふ武備の所い解御鬘纏御美
豆羅而乃於左右御美豆羅亦於御鬘亦於左右御子各
纏持ハ尺句璉之五百津之美須麻流之珠而云く有
る數小合るふ依て強て五男神の出右の八坂瓊と彼
自と爲せる中古人の杜撰ふめり

三女神の物根と成れる八坂瓊とハ本より別ふりけ
る瓊ふりふり其ハ第二一書ハ素戔嗚尊將昇天時有
一神号羽明玉此神奉迎而進以瑞八坂瓊之曲玉故素
戔嗚尊持其瓊玉而到之於天上也是時天照太神疑弟
有惡心起兵詰問素戔嗚尊對曰吾所以來者實欲與姊
相見亦欲獻珍室八坂瓊之曲玉耳不敢別有意也云
時天照太神謂素戔嗚尊曰以吾所帶之劍今當奉汝汝
以汝所持八坂瓊之曲玉可以授予矣と有る瓊ふて日
神の大御身の武備と成給へるとハ本より別ふる瓊
かり故此傳を以ても五男神の物根ハも此ハ急握

劍柄と所見たる劍ふて瓊ハ非る事を曉る可し古
語拾遺ハも於是素戔嗚神欲奉辭日神昇天之時擲明
玉命奉迎獻以瑞八坂瓊之曲玉素戔嗚神受之轉奉日
神仍共約誓即感其玉生天祖吾勝尊と有て右と同一
傳ふるが轉奉日神と云迄ハ宜しきを感其玉生天祖
吾勝尊と云ハ至てハ誤ふり按ふハ彼一書の傳を取
りぬらぐ劍より男御子の生坐る傳ハ此一書を除
て外ハ見えざれば其多きハ就て感其玉とハ記され
けむを物根を相換て男女の御子の別れ生坐る本説
ハハ符合ハざる者ふり

神祇本紀ハも初ハ羽明玉神
の素戔嗚尊ハ瑞八坂瓊之曲

玉を進くれし事を載せ又素戔嗚尊の欲獻珍宝八坂
瓊之曲玉耳不敢別有意矣云云彼此取雜へて
右と同く作直して天照太神素戔嗚尊共誓約曰吾以所
纏之玉可以授汝矣汝以所帶之劍可以授吾矣加此約
束相共換取と記して劍より女神玉より男神の生坐
る傳小合せたる此小彼小背りて持へたり
者小其多き方○是吾物也ハ古事記ハ是後所生五
小諛へる者ふり柱男子者物実因我物所成と有り此吾物ハ此ふてハ
右の八坂瓊之五百箇御統の事ハ有れども傳の誤
ふて即十握劍を云ふ由右小委しく辨へたるが如く
○故彼五男神悉是吾兒ハ古事記ハ自吾子也と宣へ
る如く其物実ハしも天照太神の大御劍より化生さ

せ御在し坐せば自然吾御子ふりてハ定めさせ給へ
るふり谷川士清説ハ夫根系脉統在父而不在母如五男
則日神猶父也素尊猶母也物根固出于日神非日種而
何耶と云る実小然る事ふり日神より物根を授給へ
ハ素戔嗚尊此を受賜りて御子を成し奉らせ給へハ
日神ハ女神小御在し坐て大御父の如く素戔嗚尊ハ
男神小ハ坐せとも大御母の如くふむ御在し坐ける
然れども夫婦相嫁娶て生る尋常の子小ハ非ず奇異
ふる所由御在し坐て成坐る御子小坐故小御子の方
より右の二大神を指て御父と申さず御母と申さず

今弟一書小孫
有と始として

と雖も日神も吾兒と詔ひ素戔嗚尊も吾兒と宣へる
事右小己三百小註るが如く次ふる三女神も此小准
下ふる故此三女神是爾兒と有る所小委しく云べき者ふり故天照太神素戔嗚尊
二大神の貴御子と大坐こせども右の物根の所由小
縁て天照太神の大御正統と立せ御在り坐す御事小
り所以小天孫降臨章以下小其天忍穗耳尊より次ニ
皇御孫尊等と係て天孫と有ハ古事記小天神之御子と有
と其訓を同く爲べき所ふるふり其弟一書小天
照太神因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子係
可王之地也と有ハ己小云る如く四神出生章小二柱

御祖神の吾己生大八洲國及山川草木何不生天下之
主者歟於是共生日神云こ有る御言の幸サキを以て其
御子孫の國土萬物の大君と齋りれさせ御在り坐べ
き御幽契有を以ふり又彼御天降の所小天照太神之
子と云るを受て天神之子と有り此を以て天孫と申
すハ天照太神之御子と申奉る小同くきを曉る可く
故此天忍穗耳尊ハ大國主神小御兄の狀如く御在り
坐せども其御言小天神御子と申し崇奉りて給へる
を以ても男御子等ハ天照太神の大御子と立せ御在
り坐が故ふる事を明くむ可く又此小就ても三女神
等も右の二大神小直

る御子ふぐく專素戔嗚尊の御子
小渡りて給へる小同く事ふり 然れども其生成し
奉給へるハ素戔嗚尊小御在り坐ガ故小此小物根を
以て詔別給へる御言有り下章第三一書小素戔嗚尊
白日神曰云ニ吾以清心所生兒等亦奉於姊と有ハ此
の詔別の御言の畏よりを申奉りて給へるふり宝劍
出現章第五一書小韓郷之島小對へて吾兒所御之國
と宣へるも皇國の事ふて右小引る天照太神の御言
小是吾子孫可王之地也と大御勅爲給へる小同く
又天孫降臨章第七一書小勝速日尊兒天大耳尊此神
娶丹鳥姬生兒火瓊ニ杵尊とも有が如くふれハ天照

太神と共小此素戔嗚尊も皇御孫尊の大御祖神小御
在り坐故小同章第一一書小故天照太神乃賜天津彦
ニ火瓊ニ杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種宝物
と有る八坂瓊曲玉ハ天統の御璽ふり八咫鏡と草薙
劍とハ天照太神と素戔嗚尊の御璽小御在り坐了由
縁を曉る可く若て日神ハ天上小素戔嗚尊ハ根國小
隔放りて御在り坐せども其御璽月神と成給ひて日
神と更ニ小晝夜を守給ひ又上章第十一一書小日神
の大御使使として保食神の許小到りて御在り坐り時
も例の神性雄健が爲小事有て日神の御怒ハ得奉り

せ給へども亦其事小因て天津日継の瑞穂出来れる
ふど何れも其御功天照太神小相並バて尊く高き
大神小御在り坐を古今の人共小此大神の御事と
云へバ甚く等差を降して然計り天統の御方小重き
所由有る事を知ず知ても悉く究め盡して云事能ハ
ざるハ甚浅き事共ふり然れバ此大神を貶し輕
しめ奉れるハ即皇御孫尊の天統を貶し輕しめ蔑如
く奉る小當りて其罪本所無き者ぞよ己小云る
が如く此大
神を又甚く悪しき神と云ひ思ふも當らず御名小
へ素戔嗚尊と負給ふ程の大神小御在り坐て其神性
の雄健小因れる者ふり其御子小大國主神御在り坐
て天下小御功高く御在り坐ふや皆素戔嗚尊の餘光

とも申奉る可き程の御事ふる者ふり○取ハ御子と給ふ事を云ふり
俗小婚小爲る事を婿取と云ひ嫁小爲る事を嫁取も
云ひ人の子を養ふ事を取子と云ふ取此小同く弟三
一書小如生男者予以爲子而令治天原云く故日神方
知素戔嗚尊元有赤心便取其六男以爲日神之子令治
天原と有る取も此小同く○子養焉ハ此多斯給比伎
と訓べく例ハ天孫降臨章小故皇祖高皇產靈尊特鍾
憐愛以崇養焉と有る崇養を加多氏養斯給布と有る
加多氏ハ上立の略ハて貴御子と爲て傳づき育給ふ
を云ふり其弟五一書小天神之子可以私養乎海宮遊

空御出現章第二
書云素戔嗚尊を
於天原國御州上而長
養焉と有る長養を
比多斯と訓り

行章弟三、一書小豐玉姬徑歸海鄉留其女弟玉依姬持
養兒焉其弟七、一書小亦云彦火火出見尊取婦人為乳
母湯母及飯嚼湯坐允諸部備行以奉養焉于時權用佗
姬婦以乳養皇子焉此世取乳母養兒之緣也是後豐玉
姬聞其子端生心甚憐重欲復歸養於義不可故遺女弟
玉依姬以來養者也有此事古事記亦然後者
雖恨其伺情不忍戀心因治養其御子之緣附其弟玉依
毘賣而獻歌之有唯養有持養有治養有
有也此多須訓此不同者又出雲風土記
神門郡高岸鄉條所造天下大神御子阿遲須枳高日

子命甚晝夜哭坐仍其處高屋造而坐之即建高椅而登
降養奉見元言意古事記玉垣又命詔何
為日足奉答曰取御母定大湯坐若湯坐宜日足奉故隨
其后白以日足奉也有日足是正字不私記比
太須者猶如日足也言允人子初生之時日數最少而漸
長養日數稍足矣故謂養長其子為日足耳有實
小然言不右若子長不比太須云不右若子長不比太須云不
年庚寅歲倭姬命年既老者不能仕吾日足奴止宣天
有御年甚老給事日足奴宣有
韓愈文子養億兆有此通證此谷川士清說所生在
素尊故曰取而子養非後世養子之謂也有然言

方廣三行前時可
日足奉四十五月之
廿四日長成登吾
子命者之有

薄雲卷廿四丁
小漸之御齡足
御在坐云

かて物根ハ日神の御物ふれども乞度して御子を生
給へるハ素戔嗚尊ハ御在り坐故ハ其理を述て此を
取給ひ日神の御子ふて日足し奉りて給ふ御事を云
ふり若て古語拾遺ハ是以天照太神育吾勝尊特甚
鍾愛常懷腋下称曰腋子今俗号推子謂和也と有り此ハ
甚く御鍾愛の餘ハ常ハ御腋ハ懐り御在り坐て子
養奉りて給へる故ハ腋子とも称奉りけりども此を
以て推子ヲサガを若子ワカコと云事の本ハ係たるハ自註の誤ふ
り豈和久と云言然る事ハ出むや傳九四丁推産靈神
の下ハ委々云を見て知べきふり儲懷腋下と云事

ハ万葉ニ三丁ハ吾妹子之形見尔置若兒乃乞泣毎取
與物之無者鳥穗自物腋挾持又四丁吾妹子之形見尔
置有緑兒之乞哭別取妾物之無者男自物脅持三丁
ハ小腋挾兒乃泣母雄自毛能負見抱見ふと有ハ同
勝れて鍾愛しむ所爲ハ有けれハ故腋子と称奉れ
るハ鍾愛し坐て御許離たぬ御子と申奉る意ふり
腋子ハ右の如く若き御子の謂ハ非れハ右の今俗号
推子謂和可是其轉語也と云ハ誤る事を知べし
其推子ハ舒明天皇御紀歌ふとハ和區吳と
ころ有けれ和伎吳と云る其例無き事ふり○又勅曰
其十握劔者是素戔嗚尊物也ハ古事記ハ先所生之
三柱女子者物実因汝物所成と有り此三女神の生出

御在り坐り物実も右ふ引り第二一書より外ハ何
れも此の如く十握劔より成出給へり由ハ傳へた
れども悉誤ふる事上百九十丁十小始て辨へつるより次
ニ議サガめ云るが如く必瓊ニ因て成出給へるふりてハ
悉相叶ハざる者ふり故此文ハ原其物根則十握劔者是
吾物也故彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉又勅曰其
八坂瓊之五百箇御統者是素戔嗚尊物也と有將欲き
所ふり獨弟ニ一書ハ天照太神則以八坂瓊之曲玉浮
寄於天真名井と有て其八坂瓊より三女神の成出給
へる傳有るのふり賀茂ずハ幡ハて此を玉依姬命と申

奉る御名坐御在り又別ハ由良比女神と申し玉若酢命と
も申すふど何れも玉ニ因れる御名ふる由己百上二
十五 小云るが如く殊ハ古事記ハ劔ニ因て成坐る
とハ記ニふが其語中ハ奴那登母ニ由良尔の言有
て此八字以音下倣此とこへ注されたるハ其原本ハ
ハ玉ふりニを世ハ多く傳ハる方ハ諛ひて何時ニり
玉を劔ニ換たると云までふて未清くも削去ざりつ
るを本の任ハ書取られたり見ゆれば却ハ其古を
知る手著ニ成れるふど證ハ取て足ぬ可き者ふり但
女神の御方ハ物根を劔ニ以て合ニるハ非ニず其五男
神の御方ハ物根を劔ニ以て悉く相合る所有る由

己小其傳小徴し奉るが如く此を以て予が弟ニ一書
を取立て真古傳ふりと云事の私章小非るを曉りぬ
○此三女神悉是爾兒ハ古事記小物実因汝物所成
故乃汝子也如此詔別也と有る是ふり今其小依て説
ひ小ハ物実因汝物所成とハ右の五男神の例小て此
三女神ハ天照太神の生出給へる御子とハ申せども
物根ハ素戔嗚尊の御物ふりければ素戔嗚尊ハしも
御父の如く天照太神ハ御母の如くして二方小且る
御子小ハ御在る坐れども爾兒と詔給へる其由縁小
因て專素戔嗚尊の御女と称奉れる事小て天忍穗耳
尊を打任せて天照太神の御子と称奉るゝ相同ぶる

事申すも更ふり故古事記小ハ須佐之男命の大國主
神小詔給へる御言小其我之女須世理毘賣爲嫡妻と
宣ひ又出雲風土記小神門郡滑狭郷須佐能袁命御子
和加須世理比賣命坐之尔時所造天下大神命通坐云
ニとも有て素戔嗚尊の御女とも御子とも申奉る御
事ふり其須世理毘賣命と申奉れるハ此三女神を一
丁小註るが如く又同郡ハ野郷須佐能袁命御子ハ野
若日女命坐之云々有る家主若日女命と申す事小
て神屋楯比賣命と同神小坐る其即此三女神又天照
小御在る坐を須佐能袁命御子と申せるふり
太神の御爲小も御女小坐る故小唯小素戔嗚尊小授
させ給へるのこゝろづ各其女神等小御事依の御事

山頼三六格寛平五年
官符日記云是天孫
神之子也云有を思ふ
可し

共有り弟一書小汝三神宜降_下居道中奉助天孫而爲
天孫所祭也ふ_上有る是ふり此事小就て己ふも引る
神宮雜例集小載たる皇太神の御託言小吾高天原在
時素戔嗚尊乃云ニ所生三女神乎宇佐島降居道中奉
助天孫而爲天孫所祭止詔之須勢理姬乃齋奉_礼留云ニ
有_二小御子とも御女とも宣_一はざれども然る意味
ふる御言ふり假令宣はずとも正しく日神の生成給
へる女御子小御在_レ坐す物を何でう_レ御子小ハ坐
ご_レじ又御女小ハ御在_レ坐ご_レじ_{其ハ謂ゆる五男}
申す時ハ主張たる日神の御子小御在_レ坐_{其ハ申せ}
とも其生成_レ給へる_{ハ素戔嗚尊小坐セ_ハ其御子を}

免_レれさせ給_ハご
ると同_レ御事ふり詔別也とハ謂ゆる其落着を別て
詔給へるふり上件の如く皇太神ハ三女神を生給ひ
素戔嗚尊ハ五男神を生給へれども其物根小原く時
ハ五男神ハ日神の御子小して三女神ハ素戔嗚尊の
御女たり又男神を乃取而子養焉有_ハ天津日嗣小定
奉_レせ給へるふり女神を便授_レ之素戔嗚尊と有_ハ降
して天孫を助奉_レるめ給_ハむとふり如此く依_レ別
させ給へるを詔別とハ云ふり然るを記傳七_{六十}小
詔別とハ五男三女_一小_一太御神と須佐之男命との御
子小て本ハ何れが何れの御子と云ふ別ハ無きを今

如て物実の事を尋て如此宣ふふり^是此記の旨小して
書紀と異ふりと云れたれども争て異ふる所の有
む其ハ詔別と云事小深く力を盡されざりしうふ
然る鹿^カ説ハ出来りけるふころ詔別と云事ハ古事
記の其中卷明宮段
小も天皇即詔別者大山守命為山海之政大雀命執食
國之政以白賜宇遲能和紀即子所知天津日繼也と有
が如く其一人一人小各其事を別て詔給ふを云事小
て此小彼五男神悉是吾兒と宣ひ此三女神悉是爾兒
と詔給へるハ即詔別と云者ふる○授之素戔嗚尊ハ
を如何小して思漏されけむ
右の三女神を賜いて日足奉るめ給へるふり下
章第三一書小素戔嗚尊の日神小申給ふ御言小且吾
以清心所生兒等亦奉於姊已而復還降焉と有^又對へ

て心得べき所ふるふり偕此三女神ハ右の如く授賜
ふと雖も其天降坐るハ此より遙小後の事ふり第一
一書小乃^以日神所生三女神令降於筑紫洲因教之曰汝
三神宣降居道中奉助天孫而為天降所祭也と有り弟
三、一書小即以日神所生三女神者使降居于葦原中國
之宇佐嶋矣今在海北道中號曰道主貴と見えたるハ
事實の因小依て此小記されたるふころ有けれ古史
徵^四第六十小右小引る下章第三一書を記し畢て次小
右の文共を書續けて説を成されたるハ甚て諾ふる
御事^{イニゴト}小ふむ有ける事の因小其行末の成行をも一ハ
續け云ハ古書の文法小て譬言ハバ

△傳二十卷三十三
三丁合考ふ可

其神ふも在れ入ふも在れ其事実不當りたる所ふも名
を擧げ其より遙ふも後ふも子孫の事をも文の緯ふも加
ふると全同故其素戔嗚尊の御事實はも此御誓言の
次ハ上章第十一書ハ所見たる保食神の許ハ到
坐る故事ハ次ハ宝鏡開始章ハ御荒びの事又
其ハ因て神逐ハれの御事ハ然りと雖も衆神等の
罪過を徴て神逐ハ逐ハる時ハふりけれハ如何ハ為
てハ三女神ハをハ手携へ坐て天降り坐ハむ然れ
バ其第三書ハ是後素戔嗚尊曰諸神逐我今當永去
如何不與我姊相見而擅自徑去歟迺復扇天扇國上詣
于天時天鈿女見之而告言於日神也ハ有て此再參升

給へりハ時の御事ハふり然るハ其次ハ御誓言ハて御子
を生給へる由ハ記されたるハ末ハ其男御子を奉ハ
せ給へる御事の有ハ牽れて其より以前ハの事ハの重複
り出たるハて誤ふる事論を撰ハず其文を過て次ハ於
是素戔嗚尊曰神曰吾所以更昇來者衆神處我ハ以根
國今當就去若不與姊相見終不能忍離故實以清心復
上來耳今則奉觀已訖當隨衆神之意自此永歸根國矣
請姊照臨天國自可平安且吾以清心所生兒等亦奉於
姊已而復還降焉と見えたる其ハ此ハ是時天照太神
勅曰原其物根則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也故

△文武天皇御紀小二年三月己巳詔此前國宗形出雲
 二郡司宜馳連任三等以上親以有類史也延曆七年冬
 十月丁亥勅國造郡領其職各殊命出雲筑前兩國廣野
 三年以來令國造郡領其職各殊命出雲筑前兩國廣野
 急無由勅使自今以後不稱國造郡領其職各殊命出雲
 神主新任之日削皆取百姓姓女等為神宮奉養之見
 此事三代格不禁出雲國造郡領其職各殊命出雲筑前
 喜事云筑前國宗像神主唯神事出たれ若此等神事
 肩君ハ上五ハ國造の狀也專神事と主と為て任奉れ
 かしらバ一郡五ハ神領初加り故ハ其部省式地ハ筑前
 國宗形郡為神郡と見宗像と有ハ隣郡ふれハ宗像の地を割て属たる故小

彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉又勅曰其十握劍者
 是素戔嗚尊物也故此三女神悉是爾兒便授之素戔嗚
 尊之有結の此其不至りて成れるふれハ日神の三女
 神小御命を令せて天降し給へるも其此時ふくずハ何

郷名と成て遺れる者ふる可し記傳七六十丁ふも引れ
 たる姓氏録右京神別小宗形朝臣大神朝臣同祖吾田
 片隅命之後也と見え又河内國神別地祇小宗形君大國主命
 六世孫吾田片隅命之後也と有り其大神朝臣同祖と
 云事ハ同録大和國神別地祇小素佐能雄命六世孫大國主命
 之後也と見ゆ但大國主命ハ宝劍出現命章小據小素戔
 嗚尊の御子小坐れば六世孫と云ハ其第一一書及古
 事記の誤を兼たる者ふく其宗形氏の其御末ふる
 事ハハも所祭る此大神小由有る御事ふり其ハ上二
 丁ハ小委く註せるが如く大國主神須勢理毘賣命

二
十
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉又勅曰其十握劍者
是素戔嗚尊物也故此三女神悉是爾兒便授之素戔嗚
尊之有る結其此不至りて成れるふれば日神の三女
神小御命を令せて天降し給へるも其此時ふくずハ何
れの時とウハ爲む其一例を云ハゞ鎮火祭詞小吾名
波下津國乎所知年止申氏石隱給氏云々有ハ伊弉
册尊より申させ給へるのこゝて未伊弉諾尊の否々
も諾とも詔給ハざるふり其より後小種々の事共有
て後小絶妻之誓を建給ひて終小其如く治賜へる小
同ト御事小筑紫胸肩君ハ和名枚郡名小筑前國宗
ふむ有ける○加多有る其地小因れる氏ふり又御名小鞍遠賀郡
像宗像之有ハ隣郡ふれば宗像の地を割て属たる故小

郷名と成て遺れる者ふる可し記傳七六十四丁ふも引れ
たる姓氏録右京神別小宗形朝臣大神朝臣同祖吾田
片隅命之後也と見え又河内國神小宗形君大國主命
六世孫吾田片隅命之後也と有り其大神朝臣同祖と
云事ハ同録大和國神小素佐能雄命六世孫大國主命
之後也と見ゆ但大國主命ハ宝劍出現命小據小素戔
嗚尊の御子小坐れば六世孫と云ハ其弟一書及古
事記の誤を兼たる者ふが其彼宗形氏の其御未ふる
事ハも所祭る此大神小由有る御事ふり其ハ上二
丁ハ小委しく註せるが如く大國主神須勢理毘賣命

小御合坐て生給へる御子事代主命坐り其須勢理毘賣命と申す
ハ此の三女神を合せて一神と坐す御名ふる事己小
其所小委く云り古事記小大國主神娶坐坐留形神屋
楯比賣命生子事代主神と地神本紀の世系を考る小
有て其亦御名ふる者ふり
素戔嗚尊兒大己貴神孫都味齒八重事代主神三世孫
天日方奇日方命亦名阿田都久志尾命四世孫健飯勝命五世孫
健甕尻命亦名健甕槌命亦云健甕因之尾命六世孫豐御氣主命亦名健甕依命
七世孫大御氣主命八世孫阿田賀田須命と有れば大
己貴神七世孫ふり然る小姓氏録小六世孫と云事ハ
其左京神別下地祇小石邊公大物主命男久斯比賀多命之後
也又山城國神別地祇石邊公大物主命子久斯比賀多命之後

也又狛人野同命兒櫛日方命之後也と有て其天日方
奇日方命を大己貴神の子と爲る崇神天皇御紀又古
事記同段の異説小依れる者小て然る時ハ六世孫小
て合る者ふり故右の由小依て其御裔の人等大己貴
神事代主神小も仕奉れるハ右の所縁小由れる者ふ
り其ハ其七年御紀大物主神の御託小天皇勿復爲怒
國之不治是吾意也若以吾兒大田ニ根子令祭吾者則
立平矣と有る其人ハ地神本紀小九世孫大田ニ根祢古
命亦名大直祢古命と有て右の阿田賀田須命の子ふり又姓
氏録大和國神別地祇小賀茂朝臣大神朝臣同祖大國主神之

後也大田ニ祢古命孫大賀茂都美命一名大賀茂足尼奉齋賀
茂神社也有ハ同紀小十世孫大御氣持命十一世孫
大鴨積命此命磯城瑞籬朝御世賜賀茂君姓有子此
人の事其ふり此神社ハ神名式小大和國葛上郡鴨都味
波八重事代主命神社ニ座並名神大月次相嘗新嘗有る是其ふり
又其並小次大友主命此命同朝御世賜大神君姓次田
ニ彦命此命同朝御世賜神部直大神部直姓有て此
時小嫡家庶流相分れたり見ゆ此ハ宝劔出現章第
六一書ふて註す可
き事ふれども此小又云ずして曾肩君の其大神
を持齋く由緒も詳ふるが故小註すふり此小
盡せりと思ふ可くるず其神子孫ふりて遠諸右の天
御祖神を持齋く由縁を知すバ有べりるす

日方奇日方命ハ檀原朝御世勅為食國政申大夫供奉
と見え大田ニ祢古命ハ瑞籬朝御世小て其間五世有
て阿田賀由須命ハ其命の父ふれハ孝皇天皇開元天
皇の御世頃の人ふる可一宗像縁起ハ孝靈天皇四年
小出雲國鞆河上より筑前國宗像小御迂行と記せる
ハ若くハ京より降りて齋初たる年曆の事を大神の
御鎮座の事と訛傳たる者ハ非らず然るハ其御鎮座
の始ハも神世の古ハ在ければ人世の事ハ係ても
云べき小非るハ思ふ可く又第三一書小所見たる如
く此三女神ハ又豊前國宇佐宮小御在し坐を臨時祭

公類史弘仁十二
年以大神宇佐
二氏為八幡大
菩薩宮司と
有ハ本著て

式小凡八幡神宮司以大神宇佐二氏補之不得雜神他
氏之有も右の所謂小同其く如三女神其ハも大神氏
人等の祖と坐が故小京より下りて祀奉り来れる小
同はりぬ可くふむ所思えたる但宇佐氏ハ宇佐國
れども其小住へる豪族ふるが爲造して他姓の人小
小水沼君等が胸願氏小相並び仕奉れる小等一
天皇二年御紀小納言形君德善女尼子娘生高市皇子
命と有り其外戚の威小依れると見えて同十三年十
一月戊申朔曾方君賜姓曰朝臣と有て八色の姓の弟
二小登ふさせ給へり續紀小養老五年正月戊申朔甲戌
詔曰文人武士國家所重醫卜方術古今期崇宜擢於百

僚之内優遊學業堪爲師範者特加賜賞勸勵後生と有る
中小醫術正七位下曾形朝臣赤麻呂純十足縵十絢布
二十端歛二十口と有て次小天平十二年春正月戊子
朔庚子授正六位上宗形朝臣赤麻呂外從五位下と見え
同十二年十一月甲申朔丁酉至鈴鹿郡赤坂頓宮甲辰
詔陪從文官并騎兵及子弟等賜爵人一級と有る中小
外從五位下宗形朝臣赤麻呂外從五位上と有り同十
七年正月己未朔乙丑天皇御大安殿宴五位己上詔授
外從五位上宗形朝臣赤麻呂外正五位上と有る此人
を如此く近く侍らしめ給へるハ右の德善が子ふぞ

△大同類聚方廿四
卷古比外病條小
勢戸布葉正七位
下曾形朝臣赤平
呂之家之方と有
ハ此人の事あり
其廿七卷水戸月
葉の下小胎形朝
臣阿古麻呂と云
る此も同人より
人なり
△たつ此程の事
て同六月辛丑筑
前國御笠郡大
領正七位下宗形
部聖牛賜益城
連姓同四年閏六
月甲子宗形部加
麻之伎賜姓穴大
連と有れバ宗形
部と云と有るハ
ウケリ

小有ける小ヤ神名式小大和國宗城上郡宗像神社三
座並名神大と有る御社小仕奉る（小就）氏（小）て已く筑前
より分れたり者と所見たり其事ハ此下小其御社
の御事を委しく傳す
る所小云べく姓氏録左京皇別小高階真人出自諡天
武皇子淨廣壹大政大臣高市王也と有る其外（小）臈ハ曾
形（小）德善ふり然るを陽成天皇實録（小）元慶五年十月十
六日大和國城上郡從一位勳八等宗像神社（小）准筑前國
本社置神主以高階真人其筑前國ふるハ世々郡領小
氏人爲之と有る考べく

△たつ此程の事
て同六月辛丑筑
前國御笠郡大
領正七位下宗形
部聖牛賜益城
連姓同四年閏六
月甲子宗形部加
麻之伎賜姓穴大
連と有れバ宗形
部と云と有るハ
ウケリ

△と見え續實
龜九年四月庚寅
授筑前國宗形
郡大領外從八位
上宗形朝臣大德
外從五位下

位下賜物有差と有る同十年二月丁巳筑紫宗形神主
外從五位下宗形朝臣鳥麻呂授外從五位上と出て此
小ハ神主と有り同十七年六月庚子筑前國宗形郡大
領外從八位上宗形朝臣與呂志授外從五位下と見え
又神護景雲元年八月辛巳筑前國宗形郡大領外從六
位下宗形朝臣深津授外從五位下其妻無位竹生王從
五位下並以下被僧壽應誘造陰埼船瀬也（小）と有り又延
暦十九年十二月勅小彼郡大領として此神主を兼帶
る事を停められし事又此神主の任六年小限りて相
替る事ふ類史不出たり實小由有る古の豪族たり

事此等^等を以知べき者ふり因小云右の金崎ハ万葉
之三崎乎過靴吾者不忘牡鹿之須賣神と詠る所七卷羈旅作ハ千磐破金
宗像郡鐘崎浦而是ふり神名式ハ謂ゆる織幡神社一
座名神大と有も其地ハ立セ給ひて其宗像大神の別
社と通ゆるふり武内宿祢命と傳ふるハ誤ふる事下
小云を以知べし船瀬ハ万葉六卷ハ名ハ隅乃船瀬後
所見又名ハ隅乃船瀬之濱ハふと云ふ船瀬ハ謂ゆる
事ふり宗形氏ハ然る著姓ふり〜〜とも何時〜
衰へたりけるハや通證ハ宗因曰延喜十四年甲戌賜
宇多帝皇子清氏宗像朝臣姓任筑前守兼大宮司以来
子孫相續^経爲其職也と云り近世ハ名高り〜宗像大
宮司是ふり貝原氏の筑前續風土記ハ其説を擧て
此説大江匡房郷諸社目安ハ見え又吉田神職注文ハ

も載之マ云り宗像社人家記ハ宗像神社ハ此より以
前ハ屢勅使を下されけるが清氏ハ祭體^祀を彼命れ〜
より以東勅使の下向を隔らる清氏宗像ハ下り給ひ
て宗像を以て称号と〜田島里片脇マ云所ハ住せ〜
る其後代ニ社務の居城ふり中畧按るハ宇多天皇の皇
子ハ清氏と云人無〜或ハ古記ハ偶漏せ〜ハや清氏
在職二十六年ハ〜弟二世氏男天慶二年補任せ〜
る宗像社人の舊説ハ是より以下近世の氏貞ハ至る
迄歴世皆中納言ハ任す世官ふり〜と云ハ此説不審
〜公卿補任ハ宗像大宮司中納言ハ任せ〜事見え侍

公其元太政官符本
 府應正五位上宗形朝臣
 式通神位管其朝臣家
 傳秘官自長任職事
 左得次郎去月九日解
 狀休謹據守内當社之
 例大宮司秩高之後以中
 以爲長事之者被補神
 職聖代之例也今氏道心
 當以仁望請官或因
 准先例補位大宮司
 有正位權中納言兼左
 朝臣伊勢宣振請者有
 宜兼知任行符到
 奉行右小史大先真人
 之有

らす是唯後世衰乱の時祖蔭ノ襲ヒテ郷里ノ於テ私
 小中納言ヲ稱シテ其家ヲ自尊貴ノ爲シ小ハヤ然レバ
 朝廷ヨリ勅任スハ非ズ可ク朝野群載ス第六ノ卷白河院
 天皇應徳元年七月廿七日の大政官符ノ正六位上宗
 像氏道ヲ以テ筑前國宗像社大宮司ノ神任トスル
 由見えたり然レバ大宮司中納言ノ非ズ事明白ナリ
 氏道ハ世譜ノ弟十世ト丁但朝野群載ス年代違ヘリ
 中社人傳ノ曰醍醐帝延喜十四年甲戌清氏勅ヲ請テ
 大宮司ト成リ宗像ノ下給ヒスル天正十三年氏貞
 の變卒ススル迄大宮司七十九世年數九六百七

十三年ニシテ宗像大宮司の家亡ビぬト所見ナリ傳
 古ク宗形朝臣ハ右ニ依リ彼延暦十七年十二月ニ宗
 形神主ヲ兼主ス事ヲ停メスル衰ヘルル
 又ハ亡ビぬル甚ク可ク惜シ事ヲ知ルけリ彼續風土
 記ニ第五十四世氏俊ハ後醍醐天皇の御時ニ當レリ
 足利尊氏君上ニ叛逆シ奉リテ都ヲ逃下リ本國粕屋
 郡多ク羅湊ス著ル時小勢ニテ其兵勢衰微ナリ
 々バ九州ノ諸士未ダ附屬セズ然ル氏俊最初ニ尊氏
 小附屬シ使者ヲ遣シ我宅ニ請待シ諸國ニ檄文ヲ
 巡ル是ニ依リ九州ノ諸士漸ニ尊氏ニ屬シ

バ尊氏忽執盛みし菊地は打勝り終み上方に責上
り帝都を頌奉り天下を奪り此後神職の身として
朝廷に背き初て朝敵に順ひ斯る仕業識者の譏如何
不也此時初て兵革の事は預りしより後世の子孫も
亦然り断つて云るが如く神に仕奉る身は在り由無
き戦を事とし其家亡びぬる神慮信し然る可く
まむ有けり第一一書る日神より神言み奉助天孫為
天孫所祭也と仰給へる大御命を蒙持せる大神に御
在り坐す者を何ぞ天孫に背奉れ悪奴を助る醜
祝の後榮を守り御在り坐しむる是腹立しき任よ

此三神宜降居道中

此筆を以て誅する者あり予宗像大神に深く恩頼を
元年由七月二日神鏡を邊津宮に納奉れり時今の大
宮目を始として救多の祝等祈禱申さしめけるよ
人予を主とす心より當社の神宝を見せ申さむと
云は何ぞと御物ありやと向はる足利將軍の甲冑
兵器を始として種々の物有り取出しはる時予ハ
心の底に彼凶黨を惡し居る事ありけり見おしと
否むは猶強てと進めけり予又強て辞しけり何
よし見給はば云は右の事共を悉く論
ひて予が奉る神鏡は其の一置るる本殿に納奉るハ
如何と云るは予悦ぶが諾ひたる事あり大凡世に
古物を賞るは然る類少くは然る斬賊の物ありも
年立の尊く見ゆ物あり然れども其物根を原ぬれ
は是れ穢しき汚き者なるを宝庫に納めし傳は
き事ありけれ
○所祭神也ハ古事記に此三女神者
曾形君等之以伊都久三前大神者也と所見たる是ふ

神名式云筑前国宗像郡宗像神社三座名神と有し傳
此大神の天降坐る御事ハ第三一書ニ即以日神所生
三女神者使降居于葦原中国之宇佐島矣今在海北道
中號曰道主貴此筑紫水沼君等祭神是也と有しか如し
口訣云三女神先降宇佐島後在筑前国故曰今在海北
道中と説るが如く其初ハ天降坐し地ハ豊前前より其
より御父大神と共に出雲国又紀伊国ニ御在し坐し
終ニ丹ニ止任給ハ
るる可し縁起云孝靈天皇四年ニ出雲国敷河上ニ
筑前国宗像ニ御遷行と有し御父大神と共に天降
坐し始ハ彼敷河上よりつゞ傳り遺れと有る可し

又紀伊国ニ御在し坐しけるハ古事記ハ大穴牟遲神ハ
十神ニ寤りしれ給へる件ニ乃速遣於木国之大屋毘
古神之御所と有し御兄五十猛神の御許ニ被遣たり
あり故隨詔命而参到須佐之男命之御所者其女出見
為日合而相婚と有し御父大神の御許ニ御在し坐し
證より然るニ其を根之堅洲国ニての事と為るハ彼
神逐ハれり後々々故ニ其事ハ心得テ文を成せる者
ハ古人の誤る者より然し其夫神と相携りて
逃出給へる後ハ即為宇伎由比而宇那賀氣理而至今
鎮坐也と有るか如く大國主神と共に出雲国ニ御在

坐るを云ふなり又上二百十の云ふ如く古事記に
大國主神坐曾形奥津宮神多紀理毘賣命と見え又
地神本紀に次坐邊津宮高津姬神と有ふなり此三
島又出雲より渡り住給へり其より後の事不
し右に引る今在海北道中今在ハ通證又轉換之辭
云々實に其如く有り現章第四一書素戔
鳴尊帥其子五十狹神降到於新羅國居曾尸茂梨之處
乃興言曰此地吾不欲居遂以瓊土作舟乘之東渡到出
雲國敷川上所居島上之岸と有るハ三女神共日彼
地又天降坐宇佐島其時着世給へり其初且
朝鮮國金富賦ハ三国史記に耽羅國の境に其初且
人亦其山を漢撃と云ふ甚奇秀の山ふた宛り也
雲海の歌花のう上ハ神靈和氣を降し神人三人を漢
翠山の北毛興元ハ化生ハ三神人同時に涌出少其神

名を高二那良乙那夫乙那乙云ふ于時日本國玉
七人の女子有り四人ハ丹波國に遣はし残り三女
命ト云ふ西南海に山在り神人三人を孕秀也
此三神人國を建むと爲す此偶無一汝輩往て事不可
後世必子孫盛ると云ふ即金木船に乘りて五穀牛
馬の種を備へ且又神人を添へ三女を衛り三神人の
國に送るハ云ふ云ふ此三女神ハ天降坐し御事を記
傳へたるハ古傳に傳給へり其古傳に傳給へり其古傳に
有る上り取て古傳に傳給へり其古傳に傳給へり其古傳に
天降居崎内山之時以青鏡玉置奥宮之表以八尺瓊紫
玉置中宮之表以八尺鏡置邊宮之表以此三表成神體
之形納置三宮即隱之因曰身形都後人改曰宗像と有
る此時を何れの時とハ思ふ人皆其説を得ざるハ
甚怪ハ事より右に居崎内山より彼三島に住世御

在_レ坐_レ大己貴神_ノ嫡后道主貴命_ト申奉_ル夫婦二
柱共_ニ相並_ハバ_シ天下を主領_ス所知食_シ向_テ御事
あり然_ル其_ノ三宮_ニ表物を置_テ祝鎮給_フ御事_ノ有
るむ此_ハ天神降臨章大己貴神_ノ天神_ノ御使_ニ令
白奉給_ス御言_ニ今我當_テ百不足_之八十限_ヲ將_テ隱去
矣言訖遂_ニ隱_ル有_ル其_ノ時_ノ事_ヲ此_ノ事を第一_ニ書_ス
天神_ノ詔命_ニ又汝應_テ任_テ天日隅宮者今當_テ供造_ス
當_テ坐_レ地祭祀有_テ天穗日命是也於是大己貴神報_テ曰天神
初教慇_ニ勤_ニ如此敢_テ不_レ從_レ命_ヲ予吾所_レ治頭露_ニ事_ヲ者皇孫當_テ治
吾將_テ退_レ治_ス函事_略中_ヲ吾將_テ自_レ此_ニ避_ク去_リ即躬_ニ披_テ瑞_之八坂瓊_而

長隱者矣_ト有_ル同意_ノ文_ニふ_ルふ_ル右_ノ天日隅宮_ハ
其_ノ國_ニを避_テ奉_リ隱_ル給_フ不_レ宮_ト云_フ事_ヲ躬_ニ披_テ瑞_之
八坂瓊_而長隱者矣_ト云_フ右_ノ以此_ニ三表_ヲ爲_シ神體_之形
納_メ置_ク三宮_即隱_之云_フ異_ニ云_フ云_フ其_ノ出_ル雲_國
其_ノ夫_ノ神_ノ神體_ノ形_ヲ留_メ天日隅宮_ニ隱_坐
並_ニ此_ノ后_ノ神_ノ御方_ニ三宮_共御形_ヲ留_置
現_レ御身_ハ其_ノ三宮_ニ出_テ鎮_給故_ニ身_ノ形_宮
云_フ習_ハ何_ノ時_ノ地_若成_リ郡_名成_レ
天日隅宮_ハ身_ヲ潛_ニ曲_ニ身_ノ形_ノ隱_身形_代を遺
せ_テ詔_ヲ其_ノ趣_一合_テ思_フ可_レ第一_ニ書_ク道

中と有り第三二書日海北道中と有り又此神名を道
 主尊と申奉れり初日宗像と云地名ハ波小
 ちを其出り給へり後日身形と云出たりが訛り
 宗像と云事風土記の趣多きを境可き者あり
 右日身體之形を古史第三十六段後引れり
 迎年邪淫之形と訓れたるハ非ず記傳七卷日迎
 能美之形と訓れたるハ因日身形部と有引合
 大日眞之然れども猶迎年美麻之形と訓へり又
 右日二書共日隱之を伊波布と訓り當り此ハ其
 神體の形代を留めり大己貴神と共ハ八十隈日隱
 給へりを云ふ水ハ迎久理麻志伎と訓り右日引御
 紀日文日合古心得て所ハ有む有む又右日八坂
 瓊紫玉ハ延佳カ舊事紀日頭書ハ在を取り其ハ
 坂紫玉と作る本ハ有れども其ハ青紫玉の字あり
 混れり如く所思ゆれハ然水ハ此宗像宮ハ大
 今ハ其を取りざる者あり

神日御身自御形を留めて隠給へる宮ハ有れハ
 天下日在り此大神日宮所ハ多日在れども此日勝
 れり無くとも御在り坐し然水ハ此三女神日現
 御身坐り當時ハ右日風土記ハ振御住處唯奥宮中宮邊宮
 日申し御名ハ奥津島姫命中津島姫命邊津島姫命
 日申し何れ其三島を號けてハ海北道中と云
 けりよ宗像と申り函頭初て分れたる程あり
 日申習ひけり但其ハ身形を美能加多と唱たりけ
 りを良後日年那加多と申記水者ありけり長
 秋詠藻日里人ハ大幣小幣並て年那加多結ぶ野辺

成けりて詠るハ夏衣を詠る歌ありむが衣ハ菊
靈ハ深穢を移し棄る物ふるが其を草以て結成す
依て身形結ぶて云ふ此ハ事ハ別ふ此ハ其形
代を指て年那加多と云ふ同ト云ふ因て引出た者
身を年と云例傳六卷九十二下云ふ上章第八
一書ニ身中を年久呂と訓じ景行天皇御紀ニ身
體をも然訓るを以知て那ハ例ハ之ヲ轉
あり年那加多と云て身之形ハ義相同ト宗像縁起
ニ第一神ハ淡を集り鳥を築居を遠海ノ奥ニ示
給ふハ末世ニ至迄ハ異國を降伏し給ふ可く由御誓
有て彼島ニ留給ふ略ト有ハ實ニ古傳ふる可く其ハ
清和天皇實錄貞觀十二年宗像大神告文ニ我皇大神

波掛毛畏岐 大帯日姬乃被新羅人降伏賜時相共
加力倍賜天我朝年救賜此宗賜禰而今如此此ハ押侮氣
色ハ露出事波最是皇大神乃南驚岐怒恚利賜岐物禰
見えたる此事紀記共且て所見ぶ事あれ
思合テ可く徴ふ種々有る其ハ對馬嶋上縣郡
三根郷佐賀村ニ宗形神社ト申テ舊社有リ社傳ニ所
祭神功皇后ト應神天皇より古昔神功皇后新羅國
少御降陣時此地ニ三流ノ神幡を残し置テ異國を
降伏し宝祚ヲ永久を誓給テ武内大臣螺螄を取テ放
出し勝鬨ノ法を被行れしなり今に至り放生會ノ儀

勝國の法等故實有り此八流の神幡ハ筑紫胸形明神
自織給へる所の幡なる故に宗像明神とも号し又織
幡宗形明神とも号し又ハ宗像八幡とも号す社地の
邊に新羅人の頭塔クヒツカ有り云々ハ此三神を合せて八
幡三所の状なり宗像大神の自織給へる幡心得ずと
雖も新羅國を降伏給ふ為に其大神を祭給へる神幡
を直に軍陣の御旗に用給へりある可し神功皇后
御紀に皇后選吉日入齋官親為神立則略中以千繒高繒
置琴頭尾と有る其時の御事就て宗像大神の御名
ハ出さざると雖も此御政を立とハ此大神の願奉る

世給ひけり云々下引る雄略天皇九年御紀に天皇
欲親伐新羅神或天皇曰無往也天皇由是不果行有
ハ此大神の御事云々征韓の御政に此大神の指揮
を仰奉る世給ふ故實ハ右の神功皇后の御例に倣ハ
世給へる云々有べき二十二社註式に宇佐八幡宮
三所一八幡二此賣神三大帯姫神と有る其此賣神ハ
此宗像大神初天より降坐し所とて神代より鎮座
る由第三一書に所見たるが如し如此に何水の國
よても八幡三所に申せば此此賣神も其齋の礼に
世御在り坐り御事云々が神功皇后胎中天皇共深

和多都美神社

其恩頼を蒙奉る由縁に因り親しく並に
御在し坐す御事より成水者ありけり
十代欽明天皇御宇豊前国宇佐郡既岸斐海山現託宣
云我是人皇十六代譽田天皇廣幡八幡麻呂也
然るに或書に對馬島上縣郡三根郷木坂山あり式
和多都美御子神社名神大地仁德天皇四十二年
癸丑冬十一月日神功皇后の神祠を令建給ふ同郷佐
賀村に在り神幅を移して神体と崇奉り神功皇
后を以て一宮として豊玉姬命を以て二宮とす後日純
体天皇御代に至り應神天皇の靈を此神功皇后の相
殿に祀祭せしを神体即右の神幅より由り八幡宮
と号奉る然るに欽明天皇三十二年辛卯又神託有て
豊前国宇佐郡形池小倉山の辺に位給ふ可き由吉
給ふに由り則神託に任せ宇佐宮に勸請し給ふ直に
木坂山本社を号を取て八幡大神と号奉る云る
然るに有ぬ可し然水に和多都美神社と神功皇后和多
都美御子神社と應神天皇の相殿と御在し坐りけり
を宇佐宮に坐り此賣神の御許に移出て此より八幡

多美都美神社

三所より成水者あり又其下縣郡和氣都美神社名
神大天武天皇白鳳六年右の木坂山なるを移祭れ
る故に其本宮八幡宮と對して新宮八幡宮と申す
云り但其與良の和名抄より見えざる郷名よれり
上日云る三女神を由良比女神と申す由有り内
より備此日或書にて引る其土人仁信精と云か
着せる稻荷勸請と云 又神功皇后御紀に夏四月壬寅
て二冊有る本あり
綱甲辰北到火前国和浦縣而進食於玉島里小河之側
於是皇后白針為釣取粒為餌抽取裳糸為縵登河中石
上而投釣祈之曰朕西欲求財國若有成事者河魚飲釣
因以舉竿乃獲細鱗魚と有り又吹又皇后還請檀日浦
解髮臨海曰吾被神祇之教頼皇祖之靈浮涉滄海躬欲
西征是以今頭灌海水若有驗者髮自分為兩即入海洗

日本書紀傳十五

〇三百三十

之髮自分也皇后便結分髮而為髻レ有少此二レ故事
ハハ皆此宗像大神レ誓奉レ世給レ入御事レ予け
ハハ幡愚童記レ神功皇后任神託針レ入海三尺鮎日
食付レ上る御髮レ浸河水神龍神二人レ童女参りて
御髮レ二レ分レ此龍神レハ嚴島大明神水神レハ宗
像大明神レ頸レ給レハハハ有ハハ妄説レハハ亦レ可レ
又諏訪熱田三島宗像嚴島レ神達取合レて三百七十
五人レ鹿島レ四十八艘レ舟レ乘給レハハハ云ハハ
御紀レハハ無事レハハハ社傳レハハハ然事レ傳ハハハ
ける者レ所見レハハハ右レ引レ宗像大神告文レハハ大帶日

姫乃彼新羅人レ降伏賜時レ相共加力レ倍賜天我朝レ守
救賜レ此宗賜レ奈利レ有ハハ御事レハハハ縁レハハハ思レ跋レ
可レハハハ有ハハハ右レ愚童記レハハハ奥レ享祿五辰年九月
ハハハ有ハハハ事レ共ハハハ古レ社傳レハハハ有ハハハ取
記レハハハ事レハハハ中レハハハ變レハハハ事レハハハ有ハハハ然ハハ
ハハハ事レハハハ取用レハハハ難レハハハ事レ共ハハハ古書レハハハ新レ合
ハハハ由無レ事レハハハ有ハハハ中昔レハハハ然心得レハハハ者ハハ
有ハハハ可レ漢籍義楚六帖レハハハ日本國古今無レ復奪
者龍神レ被護レハハハ此レ記レ說レハハハ同傳レハハハハハハ可
ハハハ右レ鹿島レ舟レ三レ給レハハハハハハ妄説レハハハハ
ハハハ其神名レ用有レ又應神天皇御紀レハハハ三十九年春二月
戊午朔遣所知使主都加使主於吳令求縫工レハハハ中略吳王
於是與工女兄媛弟媛吳織穴織四婦女レ有ハハハ四十一

日本書紀傳十五
〇三百三十一

仁徳天皇實錄
祥三年八月甲辰
前國織幡神從上
清和皇實錄
元亨五月廿七日
按前國從五位下織
幡神從五位上
像大神別社

年春二月甲午朔戊申天皇崩于明宮是月阿知使主等
自吳至筑紫時甬形大神乞工心等故以兄媛奉於甬形
大神是則今在筑紫國御使君之祖也と見えたりハ神
託ふとい御在し坐て乞ハせさせ給へりハ神名式
宗像郡織幡神社若神 有ハ宗像五社ハ其一ハ
上ハ云々如く對馬國ハ宗形神社ハ織幡宗形明神
ハ宗形ハ幡ハ申奉りたるハ思合テ可ク者ハハ
傳ハ卷ハ六ハカク亦名ヲ推日サ尊ト申ハ第捌媛神ト申ハ由タリ
又此ハ就テ思寄ハ肥前風土記ハ基肆郡姬社郷
此郷之中有川名曰山道川其源出郡北山南流而會御
井大川昔者此川之西有荒神行路之人多被殺害牛凌

△若て其珂是古
ハ決ク白月肩君
の族ナレ在ベシ

半殺于時ト求宗由北云令筑前國宗像郡人珂是古祭
吾社若合願者不起荒心見珂是古今祭神社珂是古即
捧幡祈禱云誠有驗吾祀者此幡隨風飛行墮願吾之神
遣使即舉幡隨風放遣于時其幡飛往墮於御原郡之社
更還飛來落此山道川邊之田村珂是古自知神之在家
其夜夢見臥機謂ハ都 絡謂ハ多 儻謂ハ出 來謂ハ驚 珂是古
於是亦織女神即立社祭之自尔已降行路之人不被殺
害因曰姬社今以為郷名有ハ織女神ハ決ク宗像大
神ハ御在し坐て織幡神ト申すハ同義ハ御名ハ可
△此ハ就テ思得たる事前ハ其 第一書中瀛ハ傳ハ 傳ハ 云々

但和名秋織女和名太奈八太豆女と有ハ古語拾遺
見えたる天棚機姫神の御名を取て號けたる者
代々其の別あり此三女神然る御功坐る事ハ神
の神号の本あり此大神の出たるを見水ハ正しく
機織の事御功坐る事申すも更あり其織幡袖社を
武内宿祢命と云ハ當る宗像社説ハ宗像三社日織
幡許變を加へて五社と云ハ弘大寺を加へて六社と
云ハ稻庭上を加へて七社と云ハ安藝嚴島ハ市杵島
姫命を彼所ハ勸請す有を以て其別社あり事を知
べし又續風土記ハ宗像郡奴山村日縫殿大明神有ハ
宗像神事帳ハ見ハ里民云昔神功皇后新羅を征給
ふ時船ハ帆を縫ハ神ありと云ハ今其神名ハ就ハ思
ふハ是ハ兄媛を祀ル社ハ不審ハ云ハ然る言ハ
ふハ有 又履仲天皇御紀ハ春三月戊午朔於筑紫所居
三神見于宮中言何奪我民矣吾今慚汝於是禱而不祠
秋九月乙酉朔壬寅天皇狩于淡路島略中癸卯有如風之

声呼於大虛曰劔乃太子王也亦呼之曰鳥往來羽田之
汝妹者羽挾丹葬立往也俄而使者忽來曰皇妃薨天皇
大驚之便命駕而歸焉丙午自淡路至冬十月甲寅朔甲
子葬皇妃既而天皇悔之不_下治神崇而亡皇妃更求其咎
或者曰車持君行於筑紫國而恣技車持部兼取充神者
必是深矣天皇則喚車持君以推_上向之事既實焉因以教
之曰尔雖車持君縱檢按天子之百姓深一也既分寄于
神祇車持部兼奪取之深二也則負惡解除善解除而出
於長渚嶋令板楔既而詔之曰自今以後不得掌筑紫之
車持部乃恣收以更分之奉於三神ト有_レ此筑紫所居

三神を釋紀述義に此宗像神社の御事と為るに實に
 然る事あり其下に天書第八曰五年春三月戊午朔筑
 紫宗有神有崇于臥内上禱不禮と所見たり其禱而不
 祠と云は其御記に有けれど然る事とハ御心着せ
 給はざりしより又神宗を治奉る世給ふ迄は至及
 ばせ給はざりしより又神宗を治奉る世給ふ迄は至及
 べし此は依て皇紀の己丑薨給ひ翌年天皇も引續き
 て崩御の御在し坐けり甚く忌む可畏と御事
 あり然るに此宗像大神ハ大己貴大神の后神と
 御在し坐けり相並びて幽事を所知食し御在し坐

が故に斯く可畏と御政に有けるなり彼古事記に
 即為宇伎由比而宇那賀氣理而至今鎮坐也と有るに
 て其大神の後政を所知看し御在し坐す御事をハ明
 り奉る可き者なる有ける其著明跡を一二採
 大神御父大神の御所日参向給ひ一時出見て目合ひ
 相婚給ひ少後其夫神を蛇室に令寝給ひ
 其右神蛇比禮を授け給ひ又吳公と蜂とと室
 に入給ひ吳公蜂之比禮を授けて助給ひ又八田向
 大室に喚入り御頭を令取給ひ年久木實と赤
 土とを授け終日御父大神の御心日愛く所思し
 御心安く御寝坐るに至る迄の御計ハ皆其後神と坐
 して後政を輔相給ふに因り此二三の事を以
 て大己貴神の御勢の良御盛に成り世に御在し
 坐しハ更なる想て此三女神の預り御在し坐す
 御事を明らる奉る又雄略天皇御紀に九年春二月甲
 可くある有ける

子翔遣^ミ凡河内直香賜與^ミ糸女祠^ミ酌方神^ミ香賜與^ミ糸女既^ミ
至^カ壇所^ニ及^テ將^シ行事^ス奸^ニ其示^シ女天皇^ノ向^テ之曰^ク祠神^ノ祈福^ス可^ク不^レ
慎^ム歟^ハ乃^チ遣^ハ難^波日鷹^{吉士}將^シ誅^ス之^ト時^ニ香賜^即逃^亡不^レ在天^ニ
皇^復遣^ハ弓削^連豐^穗尊^求回^内縣^遂於^三島^郡藍^原執^而
斬^焉三月^{天皇}欲^ク親^伐新^羅神^或天皇^曰無^レ往^也天皇^由
是^不果^行之^有此^{筑紫}宗^像大神^を令^祭給^ヘ之^不
之^壇所^を迦^牟迹^波訓^々神^武天皇^四年^御紀^ニ
立^靈時^於為^見山^中之^有同^ト大神^ノ勸^請祭^場
を^構ヘ^テ令^祭給^ヘ之^乃下^文天皇^欲親^伐新^羅之^有水^ハ其^故令^祠給^ヘ之^上註^セ神^功皇后

の御政^ニ倣^ヒ給^ヘ之^者多^ク然^レ水^也其^時皇后^選吉^日入^齋宮^親為^神主^ト有^カ如^ク高^ニ御^自其^政
を^執行^ハセ^御在^シ坐^シ依^テ神^祇御^助殊^々之^けを^今度^ハ其^大事^ノ御^祈之^甚事^者輕^ク之^事已^ニ
状^乃め^け水^ハ然^ル事^ト有^レ之^事已^ニ
不^祥之^故御^軍勝^セ給^フ事^カ故^ニ神^或天皇^曰
無^レ往^也云^フ如^ク御^教有^レ之^者可^ク備^壇所^ハ
必^撰津^國右^ノ凡^河内^直下^居之^地也^之
也^孝周^天皇^元年^御紀^ニ差^勅使^高擇^良田^勅使^奉勅^宣
於^大河^内直^味張^ト有^テ惜^ミ奉^ス之^事也^之

月己卯朔壬午行幸於三島略於是大河内直味張恐畏
求悔伏地汗流啓大臣曰愚蒙百姓罪當萬死伏願每郡
以饗丁春時五百丁秋時五百丁奉獻天子孫不絕藉
此祈生永為鑿成別以狹井田六町賂大伴大連蓋三島
竹村宅倉者以河内縣部曲為田部之元於是起有
右月香賜於三島郡鹽原下執ハ水たるをハ彼此
思合すハ必其地ある可く所思ゆハあり
通証ニ或
豊島郡平尾村有宗像神祠ト云るハ撰津志ト云るを
取ル以テ云ハめり祭場ハ唯一時其神を祠ト為スりハあり
ハ其址ト又神社トあり有リ心ハありハ水ハありハ若其壇所
ありハ事ハ傳フてハ後ニ小祠を營シ祭ルハハむル亦知
る者ありハ聖武天皇御紀ト天平九年四月乙巳遣使於

伊勢神宮大神社筑紫任吉八幡二社及香椎宮奉幣以
告新羅不禮之状ト見ルえル此を日本紀略ト載スる
ト同ト事ト有リねドも右ニ筑紫ハ上ニ云フる神功皇
后ノ新羅を降伏給フる例ト履仲天皇御紀ト筑紫所
居三神ト有リを合セるハ禱スるハ必此宗像神社ノ御事ト
あり然レハ二社ハ三社を誤ルるハこノ宗像任吉菟崎
ト三社ト成ルるを筑紫ノ任吉ト續ク意ト見テ二
社ト誤ルる者トありむハ仁明天皇御紀ト承和九年秋
二月癸巳朔乙未遣使於筑前國宗像神ノ竈門神ノ肥後國
健甞龍神等諸社奉幣ト緑有リ崇セ也ト有リ下ニ引ク負ク觀

祥

仁明天皇御紀
嘉祥七年四月
丙午朔丙寅授
八等宗像神從
五位下と有る此
を筑後國高
良玉岳神の次
載りしと雖も
筑前國の事
著明きハ次を
嘉祥の神階の
合ハ天安の勲
位ハ合るを以
知らるる事

十二年宗像大神告文に依り考るに其以前より筑前
肥後の邊より然る變災度しは在りて見ゆ右の竈門
神社ハ神
名式に筑前國津笠郡竈門神社名神大と有る是より
嘉祥三年貞觀元年の神階より宗像神と共に預りて
給へる此神社より玉依姫命を申奉りて
宗像大神は御在り坐中事下に別云べし神階の御
事ハ文德天皇實錄に嘉祥三年冬十月乙巳朔辛亥進
筑前國宗像神階授從五位上仁壽三年二月癸亥加筑
前國宗像神正五位下天安元年冬十月乙丑朔丙寅在
筑前國正四位下勳八等宗像神授正三位と有る然る
に同二年閏二月癸巳朔戊午在筑前國正四位下勳八
等由心姫神湍津姫神市杵島姫神並授正三位と有る

社名と神名との精粗有るのこゝろ有れ事の相同ト
ヨハ重出する者あり可し清和天皇實錄に貞觀元年正
月廿七日甲申奉授筑前國正三位勳八等田心姫神湍
津姫神市杵島姫神並從二位と見え同二月廿日丙辰
筑前國從二位勳八等田心姫神湍津姫神市杵島姫神
並授正二位大政大臣東京一條第從二位勳八等田心
姫神湍津姫神市杵島姫神並授正二位此六社居雖異
實是同神也と有る此東京一條第より今花山院家
に坐す宗像大神に坐す此事次より別條を立て云べし
又陽成天皇實錄に元慶五年十月十六日大政官處分

依請大和國城上郡從一位勳八等宗像神社准筑前國
 本社置神主と見え類聚三代格に大政官符應充行宗
 像神社修理科云云件神坐大和國城上郡與坐筑前國
 宗像郡從一位勳八等宗像大神同神也舊記云是天照
 太神之子也太神勅云汝三神降居道中奉助天孫為天
 孫所崇祭者今國家每有新請奉幣件神是本縁也唯筑
 前社有封戸大和社未預封例云云と見ゆ此より以前
 二從一位を授給へり御事見えずと雖も是從一位を
 證文より此に因り筑前國本社大和國宗像神社東
 京一條亭宗像神社合せて三社共々等しく神階を進

公若下三百四
 如、幾程と無く小條
 差三神に正位を極
 進奉り給へりと思
 下證有れんは、大和
 公若下若く正位を
 進奉り給へり

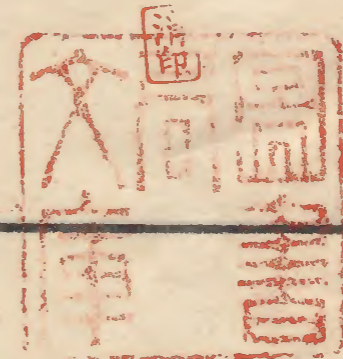
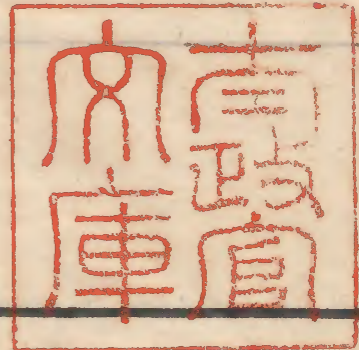
奉り給へりなりけり此例猶有り大和國添上郡春
 新嘗に有ハ鹿島香取枚岡の三神を此より祭水事
 予已に春日祭講義に云々か如く然るに其三神の
 神階をハ各其本社に奉り給へり何時も春日祭
 へ給へり毎々本社に其日准りて進ませ給へり
 あり此に依り思ふに右の宗像本社に神階を京
 大和ありたり奉り給へり本社に成水るハ本
 神階に成水るも有りけり相通ハ心得へり事
 あり有 又其清和天皇實錄貞觀十二年二月十五日勅
 して從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄を遣して
 幣を宗像大神に奉り給へ其告文に天皇 我詔旨 止
 掛毛 畏岐宗像大神乃廣前申給止申久 去年六月以
 來大宰府度二言上 須良 新羅賊船二艘筑前國那珂郡

乃荒津尔到来天豊前国乃貢調船乃絹綿字掠奪天逃
退利又廳樓兵庫等上尔依有大鳥之怪天卜求尔隣国
乃兵革之事可在止卜申利又肥後国尔地震風水乃災
在天舍宅悉仆顛利人民多流亡利如此之災比古來未
聞止古老等毛申止言上利然向尔陸奥国又異常留地
震之災言上利自余国二毛又頗有件災止言上利傳聞
被新羅人波我日本朝止久岐世時利與相敵比來利而今
入來境内天奪取調物互利無懼沮之氣量其意况尔兵寇
之前自此而生加我朝久無軍旅天專忘警備利多兵乱之
事尤可慎恐然我日本朝波所謂神明之國利那神明乃助

護利賜波何乃兵寇冠冠亦我皇大神波掛毛畏岐
大帶日姬乃彼新羅人字降伏賜時尔相共加力賜天戎
朝字救賜比崇賜利而今如此尔押侮氣色字露出事波字
最毛是皇太神乃聞驚怒恚利賜倍物奈利故是以從五位
下行主殿權助大中臣朝臣同雄字差使天禮代乃大幣
帛字令捧持天奉出給布此状字平久南食且假令時世
乃禍乱天上件冠賊之事在岐物奈利掛畏皇大神因
内乃諸神太知唱導波賜天未尧向之前尔沮拒排却賜
倍若賊諱已熟天兵船必來久在波境内尔入賜波須之
遂尔還漂没米賜天我朝乃神回止憚礼來留故實字流

多之失賜布自此之外尔令假止之夷倭乃逆謀叛乱之事
中国乃盗兵賊難之事又水旱風雨之事疫癘飢饉之事
尔至萬天国家乃大禍萬姓乃深憂止可在良祥比皆悉未
熟之外尔拂却銷滅志賜天下无躁驚又国内平安尔
鎮護刑救助賜比天皇朝廷乎宝位无動常盤堅盤尔夜
守晝守尔護幸倍矜奉給上倍恐美恐美申賜止又申と見
元た此よ此大神の天孫を奉助給て其大凡の
知られり又陽成天皇實錄云元慶二年十二月廿四
日乙酉遣兵部少輔從五位下兼行伊勢權今早朝臣季
長向大宰府奉幣檀日八幡及姬神住吉宗形等大神其

檀日八幡姬神別奉綾羅御衣各一襲金銀裝宝劍各一
以被府奏有託宣云新羅凶賊欲窺我障肥後国有大鳥
集河水變赤等之怪也こ所見たり右の託宣と同
月十一日の下は是日大宰大貳從五位下嶋田朝臣忠
臣等奏言檀日宮有託宣云新羅虜船欲向我國宜為之
備と見えたる是を云ふり但右の五神ハ何れ也筑前
本より式外より其八幡ハ神名式又那珂郡ハ八幡大菩薩
薩宮崎宮名神大と有日當る可し然ら又姫神と云ハ
式内より式外より且し所見無し故思ふ不し右の八幡
姫神ハ共日豊前國より四神名式又宇佐郡ハ八幡
大菩薩宇佐宮名神大比賣神社名神大比所見たり是
多くむら此比賣神ハ申す多く此三女神ハ御在し
坐し然れ此社ハ異多く為す侍右の如く朝廷よ
音より別神ハ如く思來る事あり



中祭とせ給ふ所ハ唯一所あるか如しと雖も三社各
 所を異よしし今も奥津宮中津宮邊津宮と三所又立
 せ御在し坐す事猶古り如し神威の真盛は御在し坐
 す御事ハ天下に比類無しと申す計より右等事
 此日記し續かむと思成しども猶熟思ふに第二
 一書に就て註す方目易くて可なり如可ければ其
 委ねつ傳十七六十を見たり可なり此又次て右の大
 和國とると東京一條第とると筑前本社と同等は
 會釋はせ奉給ふと御社に御在し坐せば先右の二社
 の事を明し奉りて然後に國々御在し坐すをも申

十五、七
 岩田校合
 大島侯庵

